

日本で最初のプラネタリウム解説

電気科学館の開館前特別投影

日本で最初のプラネタリウム施設である大阪市立電気科学館は、1937(昭和12)年3月13日にオープンしました。開館時のプラネタリウム投影は、どのようなものだったのでしょうか。当時の資料から見ていきましょう。

ドイツから輸入したプラネタリウム投影機、カールツァイスⅡ型は、1937年初めから組み立てが始まり、2月20日に完成しました。3月に入ると視察や来賓の迎え入れと並行して、いよいよ本格的な開館準備に入りました。その中で、3月4日に東久邇宮稔彦王殿下がご視察で電気科学館に来館された際に、約40分間のプラネタリウム投影も行われたのですが、これが記録に残る日本で最初の本格的な投影と考えられます。解説は京都帝大の山本一清教授が担当しました。現存する概要書によると、投影は次のような構成です。

- ① 太陽系の惑星図の投影
- ② 3月3日の夜の空の投影
- ③ 3月4日の日の出から日の入りまでの日周運動と、太陽の説明
- ④ 惑星の紹介
- ⑤ 3月4日の星空の紹介
- ⑥ 興味深い天体の写真を投影して紹介

全体構成としては、おなじみの日の出入りの演出はないですが、現在でも通用する標準的な内容と言えます。冒頭①の惑星図の投影は、夜の暗闇に目を慣らすためのもので、細かい配慮が感じられます。

開館直後のプラネタリウム

3月13日、いよいよ電気科学館がオープンしました。プラネタリウムの投影は1日5回、各回の投影時間は45分間でした。

開館時のプログラム構成は、大阪の宵の空の紹介、太陽の公転運動と季節変化、月の満ち欠けと公転運動、北極の星空と白夜、南半球で南天の星空の紹介、彗星と流星の紹介、という流れで、大変盛りだくさんの内容です。

さて、実際の解説の様子ですが、残念ながら

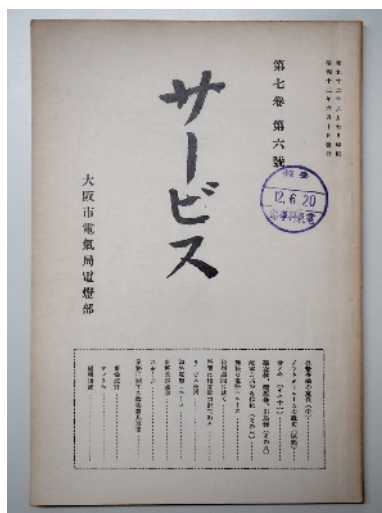


写真1:『サービス』1937年6月号の表紙

当時の音声記録は残っていません。でも、解説をそっくりそのまま文章にした記録が、電気科学館を運営していた大阪市電気局電灯部の社内報『サービス』（1937年7月号）に掲載されています（写真1、2）。「プラネタリウムの説明（速記）」という記事で、4月15日の第4回投影とのことから、開館から約1カ月後となります。解説を速記でそのまま記録し、文字に起こしたようです。

プラネタリウムの解説ナレーション

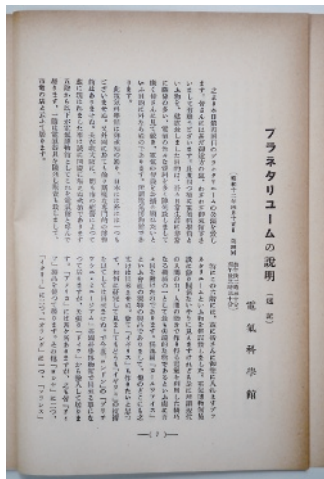


写真2:「プラネタリウムの説明」の冒頭部分

では、「プラネタリウムの説明（速記）」のごく一部を紹介します。投影当日の夕方、西空に見える冬の星座の解説部分です。漢字の旧字体は新字体に、かな遣いは現代かな遣いにしています。プラネタリウムで、解説者がポイント（矢印）を操作しながら話している姿を想像しながら音読すると、解説気分が味わえます。

「この三つ星のこの辺を我々がオリオン星座と呼んでいる部分であります。星座というのは、ちょうど地上を区分して大阪府、奈良県、兵庫県、というふうに唱えているように、空をいくつかの星座に分けて呼んでいるのであります。例えば、オリオンはここ。牛はここ。ぎょしゃはここ。ふたごはここ。こいぬはここ。おおいぬ、かに、しし。北斗七星のある辺はおおぐま。それからここに北極星がありますが、これだけの部分

がこぐま、という具合に、全天に約90ほど星座の名前を付けています。こうしておきますと、空のどの部分ということが便利でよろしいが、これはあまり学術的には大して意味はありません。通俗的の空の話というにはちょっと面白いのであります。」

いかがでしたか。星座の解説パートはもう少しあるのですが、前述のように45分間に多くの内容を盛り込んでいる関係か、星をたどって星座の形を丁寧に説明するような感じではありません。また、全体の印象としては、観覧している人々への問いかけがなく、講演的な感じがします。

電気科学館開館時の投影をご紹介します。開館直後は、一つのテーマを詳しく紹介する「テーマ解説」や、投影が夕方の日没から始まり、翌朝の日の出で終わる演出は見られません。この演出が誕生するのは、開館から半年後くらいようです。

嘉数 次人(科学館学芸員)